

# ハワイ沖繩移民たちの短歌

## ——太平洋における日本人・日系人の文学——

仲程昌徳

2005年の9月、インドネシアのスラウェシ島、北スラウェシ州マナド（メナド）に行った。そこでは、マナドの荒れ果てた外人墓地に埋葬されていた沖繩出身者の遺骨を掘り出し、北スラウェシ州ピトンに新しい墓地を求め、改めて埋葬し、丁重にお墓の管理をなさっている宮古島出身の方にお会いして、話を聞くことができた。世の中には、人に知られないで、大切な仕事をなさっている方が居ることを知った。

2006年1月、ペルーの沖繩移民100周年が開催されるのを記念に、WUB（Worldwide Uchinanchu Business Association）の主催する学会会議というのがあるが、リマに行った。会議の前に100周年記念式典があって、それに参加するため、リマの沖繩会館の入り口に立っていたら、車椅子の方から声をかけられて、びっくりした。というのは、その方の言葉が沖繩語であったからである。それだけではない。そのあとボリビアから来られた方、ブラジルから来られた方とも遭ったが、最初から最後まで、沖繩語だった。ずいぶん懐かしい言葉がでてきて、感銘をあらたにしたものである。

同年3月、マーシャル諸島共和国の首都マジュロを経由して、南洋庁支庁所在地であった、ジャルト（ヤルト）に行った。そこは、ホテルというものがないばかりか、レストランがなく、電力会社の宿泊所に寝泊りして、自炊になった。自炊と言ってもサッポロ一番ラーメンと缶詰を開けるといったもので過ぎなければならなかったが、私たちはたいへん幸運で、ニホンゴを話す方に出会い、案内してもらった。

砲弾のあとの生々しい電信電話局や測候所の廃墟、そして今はすべて消えてしまったヤルト支庁跡、国民学校跡、公学校跡、病院跡、そして沖繩の人々が住んでいた鰹節工場跡などを見て廻った。その案内をして下さった方は、公学校の時、金城先生に教えて頂いたということであった。金城という姓は間違いなく沖繩の出身であると思われる。南洋庁のあった最果ての島までやってきて、沖繩の人たちは、頑張っていたのである。

その後、ニューカレドニア、そしてフィリピンへ行った。ニューカレドニアでは「ナハシ」というホテルがあってびっくりしたこと、フィリピンでは敗戦後、沖繩にきたフィリピン人と結婚してフィリピンに渡った十数名の沖繩の女性たちの話を聞くことができた。そのように、さまざまな国や地域で、沖繩と関わる見聞をして、心を打たれるものがあった。

私が、そのように、国々、島々を歩き回るのは、沖繩を出て行った、いわゆる移民たちの足跡を丁寧にたどってみたいと考えているからである。そして、私が、知りたいのは、彼らが、それぞれの移住地で、何を思い、どう暮らしていたかということである。幸せなことに、昨年度、1年間、ハワイで暮らすことができた。ハワイは、最も多くの移住者が暮らした地であると同時に、現在も、沖繩の伝統的な沖繩語表現になる琉歌が、盛んに詠まれている所である。

そこで、私の調査は、ハワイの雑誌や新聞に、いつ頃から沖縄の伝統的な表現になる琉歌が掲載されるようになったのか、といったことを調べることから始まった。雑誌、新聞等をめくっていくうちに、琉歌だけでなく、短歌、俳句、そして小説が数多く残されていることも知った。ここでは、沖縄から移住した人々による短歌について概観したい。

1983年『布哇タイムス』は、中野次郎の「ハワイ秀歌」を連載していく。その中に、沖縄出身者では上江洲芳子、比嘉静観、比嘉三良の3名の短歌が取り上げられている。中野が彼らを取り上げたのは、彼らの作品が優れていたことによるのだが、あと一つには、彼らが、ハワイの短歌結社に属していたということもあるだろう。

ハワイには、「マウイ川柳吟社」「ヒロ蕉雨会」「をだまき支部」「布哇俳句会」「潮音詩社」「山峡短歌会」「川柳ウイロー社」「歩道短歌会ハワイ支部」「青夏吟社」といった文芸結社のあることが1961年の「布哇タイムス」には報告されている<sup>1)</sup>。

そこには出てない結社で、戦前から日本の雑誌『改造』で紹介され、よく知られていたのに「ヒロ銀雨社」というのがあり、3名とも、その有力な同人であったということがあり得る。「ヒロ銀雨社」の詠草は、新聞の文芸欄で毎月掲載されていたし、主人をなくしてハワイを去った上江洲を別にして、静観、三良は、同会の常連として活躍していた。中野は、「ヒロ銀雨社」を代表する歌人として、彼らを見たということがあるはずである。

短歌を作ったのは勿論彼らだけではない。彼らのほかにも、沢山の短歌表現者たちがいたのであり、本稿では、彼らの残した印象深い歌を中心にして、ハワイの短歌を見ていきたいと思う。

まず、沖縄出身者が、新聞の短歌欄に登場するのはいつ頃からか、という問題があるが、それは、1919年（大正8年）頃から始まるのではないと思われる。少なくとも、新聞の「新年応募作品」欄への登場は、この年に発表された嘉数南星の短歌七首をもって始まったとって間違いない。その後、少し間をおいて1924年（大正13年）に当間かげろうの2首、1925年豊川走川の10首、1927年（昭和2年）「潮音詩社選」になるもので安里生の6首、といった人たちの作品があつて、1930年代に入っていく。

1910年代に登場した嘉数南星から1920代末に登場した安里生までの短歌は、いわゆる日本の歌壇の影響が強いもので、ハワイで読まれた作品とは言えないものである。日本の短歌雑誌のどのページにでも見られるようなものであったと断言していいもので、ここで、特に取り上げて見るほどのものではない。1930年代に入ると具志堅栄子、石垣玲子といった、沖縄出身者だと思われる女性たちの歌がみられるようになる。同時に比嘉秀一、伊波生、中城若松、当間嗣栄、与那原露泉などの名前が出てくる。1940年代になると当間しせい、大城英二、仲間繁雄、仲間孝善、仲間清吉といった人たちの歌が見られるようになる。

30年代から40年代まで、沖縄出身者の歌が相次いで見られるようになるが、42、43、44、45、46年と、太平洋戦争への突入後から日本の敗戦まで、新聞の欠如、戦争による影響などで詩歌欄が消失するといったことなどもあり、空白になる。

沖縄出身者の歌の登場は、大戦後の47年から、あらたに始まっていくというかたちになるが、30年代末から41年にかけて登場した人たちの歌は、10年代から20年代にかけて登場した人たち

の作品と異なるものが見られるようになる。

ペレの神住むてふ島のゆくりなく故郷を恋ふる又春の来し（中城若松，36）

見はるかす海の彼方にモロカイの島淡く見ゆ朝明けに（与那原露泉，38）

「ペレの神」や「モロカイの島」といった言葉を取り込んで歌われたこれらの歌は、その言葉とともに、望郷、夜明けとともに始まる労働といった内容から、ハワイの歌として取り上げることの出来るものである。

戦後の47年には、中野次郎によって取り上げられた比嘉三良が登場する。そして、48年には玉城文子が登場した。玉城の登場は48年だけあるが、一挙に12首の作品が掲載されている。その数の多さもさることながら、「帰郷」と題して歌われた歌は、特別のものがある。

故郷は椰子の葉末にすすり泣く雨を降らして我を迎ふ

甲板に上りて仰ぐアロハ塔幾年君を恋しわれかな

これらの歌は、明らかにハワイで生れた人の歌である。ハワイで生まれ、何らかの理由で日本に行き、戦争になって帰れず、今やっと、故郷ハワイに戻って来る事ができたという、その思いが強く現れたものとなっているはずである。

「帰米二世」の諸問題については、これからの仕事の一つでもあるが、彼女も「帰米二世」というのであろうか。いずれにせよ、彼女の歌は、ハワイで生まれた者の歌であると言っていいであろう。

1950年代に入りますと山里慈海（50）、大嶺真鶴（54）、安里もりしげ（54）が登場してくる。続けて1960年代に入ると幸地南枝（暁雨）、仲間安兵衛（66）、照屋農人（68）、安慶名蕉風（68）田場典守（68）といった人の歌が見られるようになる。そして70年代末には『ハワイ・パシフィック・プレス』が創刊され、短歌欄が創設されると共に、彼らの歌が毎号掲載されるようになる。

『日布時事』（後の布哇タイムズ）、『布哇報知』（後の布哇ヘラルド）の「新年応募作品」欄の短歌欄を飾り、その後『ハワイ・パシフィック・プレス』の短歌欄に名を連ねた歌人たちの中で、当間しせい、当間嗣栄、大嶺真鶴、幸地南枝、比嘉三良といった歌人たちの活動には目を見張らせるものがある。

彼らの個々の作品については本論では割愛するが、ここで、もう一度もとに戻り、玉城文子以後の、戦後の歌について見ていきたい。

来し便り見れば故郷の人達のみじめな暮し胸を打つなり（大里なつよ，48）

冬の雨見つつ昔を思ひ居りハッピーコウによごれしことなど（仲間安兵衛，64）

そのかみの父母の姿がまぼろしに汗にまみれつホレホレ歌う（安慶名蕉風，68）

父母を遠くはなれて早七年夕べとなれば故国の恋しき（仲宗根シゲ子，64）

40年代末から60年代末にかけて歌われたこれらの歌もまた、ハワイの地で歌われた歌であることがよく解るものである。

大里の歌は、戦場になってすべてを失った沖縄に思いをはせた歌、仲間の歌は、移住当初の労働のつらかったことを思い出して歌った歌、安慶名の歌は、両親の労働を思いやった歌、仲宗根の歌は、いわゆる「戦争花嫁」、このことについても今後の仕事として遺された大切な課題の一つであるが、戦後ハワイにやってきた人の歌と言える。

大急ぎで60年代までの歌を見て来たが、そこには移住当初の苦勞をしのばせる歌はみられるものの、それはすでに「昔」であり「父母」の時代のものであったとして歌われたものであった。これらの歌は、いわゆる「草分け」と言われる人たちが詠んだ歌ではないと言って良いだろう。

「草分け」移民の詠んだ歌というのは、ほとんどないと考えられる。「草分け」移民は、儲けに行ったのであって、歌を作りに行ったわけではない。彼らの歌は、なくて当然ともいえるが、そこにはもう一つ、彼らが「日本語」に堪能でなかったという理由があったのではないだろうか。

では、彼らの言葉で作ることの出来た「琉歌」はどうだったかということがあがあるが、これもまた「表記」という問題があって、たくさん歌われたと考えられるものの、残っているのはほとんどないと考えられる。それだけに、仲間や安慶名の歌は、大切な歌ということになる。ハワイ移民の生活を、歌でたどっていくとすれば、仲間や安慶名の歌が、その開始を告げるものになるはずである。

そして

千金にまさるてふ子等の笑あれば足らぬ生活（くらし）も心あかるし（うるま女，51）

といった歌や

この家に共に育ちし日は遠く娘等大陸に行きて帰らず（暁雨，64）

といったような、貧しい中で子供たちを育てた日々、そして家を離れていった子供たちが歌われる時代になる。

その後を、さらに大急ぎでたどっていくと、

過ぎし日の移民の生活（くらし）を祖父に問う孫の日本語をほほえみて聞く（嗣榮，71）

過ぎし日を勞（いた）わりながら二人なる老後の生活（くらし）をうなずき合へり（嗣榮，74）

といった歌にみられるように、孫のことそして夫婦二人だけの老後が歌われるような時代になっていく。

70年末以降、すなわち『ハワイ・パシフィック・プレス』に短歌欄が開設されて以降、毎月、

数多くの沖繩出身者の歌が掲載されていく。そこに見られる歌は、そのほとんどが老後の生活を歌ったものであるが、同時に、沖繩を歌った歌も数多く見られる。

旧盆のウンケーなりと言はるれば故郷の墓の扉目にみゆ（三良，81）  
ふるさとはとにもかくにもなつかしき年とれば更に幼き頃が（しせい，81）

そのように、折り目、節目にちなんで思い出される沖繩，年をとっていくに従って，懐かしさのましていくものとして沖繩が歌われていくのだが，そのような歌は，彼らの世代で終るのではないだろうか。

ようやくに帰化市民となりしかど先祖の墓はふるさとにあり（真鶴，69）

ハワイにやってきた人たちの心の中には，この歌に見られるように「先祖の墓」のことがあった。彼らは，常にそのことが気になっていたのである。

しかし，彼ら自身が，いつのまにか，ハワイに居つくことになってしまったことで，その子供たちの古里は，ハワイということになるだろうし，沖繩を思い出すこともなくなるのではないだろうか。

その後，沖繩が歌われることがあるとしても，それは明らかにこれまでの歌人たちが歌った沖繩とは異なるものになっていくのではないかと思われるが，どのような沖繩が現出するか，興味の尽きないところでもある。

私の仕事は，沖繩の人々の書いた作品を，収集，整理し，研究するというものだが，いつか，ぜひやらなければならないと考えていたのが，海外に出た沖繩出身者たちの作品の収集，整理，研究であった。

ハワイに一年いて，やっと仕残していた仕事の幾分かをやることができた。その一端を，ここで述べることができたことを嬉しく思っている。

## 注

- 1) 「日系文化に一役，布哇文芸結社めぐり」『布哇タイムス』1961年